

序章

—目標・評価サイクルの徹底した継続で前進—

1. 2007年度の認証評価と現在までの改善過程の概略

金城学院大学は、2008年3月19日付けで、財団法人 大学基準協会より、大学基準に適合している旨の通知を受けた。

その中で、「2003(平成15)年度以降は、(1)総合女子大学への発展、(2)企業との連携強化、(3)大学のブランド力強化と理念・教育目標の具現化の3つを運営方針として掲げた上で、実務能力の養成を図る教育課程、時間割のゾーン化と固定化、資格取得支援、各種学生生活支援などの学生の視点に立った教育改革が誠実に遂行されている点は、貴大学の特色として評価できる。

2005(平成17)年度に本格的な理系学部である薬学部を設置したことにより、現在、5学部2研究科となった貴大学は、総合女子大学への発展の第1歩を踏み出したと言える。」という総評をいただくとともに、問題点の指摘とそれに関連した改善のための10点の助言が付されていた。

その後、大学をあげてそれらの改善に向けて取り組み、2012年に改善報告書を提出した。その結果、「今回提出された改善報告書からは、これらの提言を受け止め、改善に取り組んでいることが確認できる。」との概評をいただき、再度報告を求めるとの事項はなかった。とはいえ、概評の中で取り組みの成果が十分に表れていない事項について一層の改善努力を促す指摘もあった。

また、2007年度の大学評価に際し、申請資格充足年度を経ていなかった薬学部については、2012年に完成報告書を提出し、概評として、「同学部は「キリスト教の精神を基盤とし、人に対する『優しさ』と社会でのリーダーシップを発揮できる『強さ』を併せ持つ、豊かな人間性と実践的能力を兼ね備えた女性薬剤師の養成」を教育目標と定め、それに基づき教育・研究活動を行っていることが認められた。・・・

以上のことから、学生の受け入れに課題が見受けられるものの、目標はおおむね達成されていると判断される。」と記され、追加の報告を求められる事項はなかった。

2. 金城学院大学が設立された目的とその沿革

本学は、福音主義キリスト教に基づき、女性に広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、もって真理と正義を愛し、世界の平和と人類の福祉に貢献する女性を養成することを目的とする。

そのルーツは、1889年、米国南長老派ミッションの宣教師アニー・ランドルフが私費を投じ、私邸の中に設立した「女子専門冀望館」であり、その後、校名を「私立金城女学校」とし、1915年、省令に基づく高等女学校となった。

1947年、学制改革により金城学園中学校が認可され、翌年には、金城学院中学校に改称し、金城学院高等学校も設立された。経営母体についても、1951年に私立学校法に基づいて寄附行為を制定し、財団法人金城学院は学校法人金城学院として出発することになった。

本学は、1949年に設立された。英文学部英文学科の単科大学から始まったが、次第に教育の幅や奥行きを広げ、2005年には、本学初の理系学部となる薬学部が開設されるなど、

序章

今日では東海地区随一の女子総合大学となった。

金城学院および本学は、聖書の教えに基づいて、豊かな人間性と深い専門的学識をバランスよく兼ね備えた女性を社会に送り出すことを目的としている。このため、金城学院のスクールモットーとして、学問をする者の姿勢を表す言葉、「主を畏れることは知恵の初め（箴言1章7節）」を定め、大学の教育スローガンとして、どのような学生を育成したいかを表す言葉「強く、優しく。」を定めている。

3. 自己点検・評価の体制

本学は、1994年に「金城学院大学自己評価委員会規程」を制定し、大学自己評価委員会を発足させた。大学自己評価委員会は、毎年度の自己点検・評価を実施するとともに、金城学院大学自己評価白書『WINDOWS』を、1999年、2002年、2003年、および2008年に発刊した。2008年刊行の『WINDOWS Vol.4』は、2007年に大学基準協会に評価申請のため提出された『金城学院大学点検・評価報告書』と『大学基準協会大学評価結果報告書』とから構成されている。本学ではこの評価を重く受け止め、改善を求められた点について真剣に対応した。その結果は、冒頭に記した通りであるが、改善すべき点は依然残っていることを認めなければならない。ただし、重要な点は、「目標」、「実行」、「点検・評価」、「改善方策」というPDCAサイクルを徹底して継続していかなければならないという姿勢である。

この点を、学科のレベルで考えてみると、「教育効果に関する数値目標」がある。各学科は、自らの教育目標にあった数値目標とその実現計画、対策を自己評価委員会に提出する。目標は、学科が目指す分野への就職率、国家試験合格率などであるが、あくまでも数値にこだわる理由は、数値でなければ評価が難しく、計画の実効性が担保できないからである。PDCAサイクルは、進化と成果向上に必須と位置づけている。

同様の点を、学生の観点から考えると、「学生と教師をつなぐ授業改善レポート『VOX POP』」の刊行があげられる。これは、各教員の授業のやり方について学生アンケートを取り、その結果をレーダー・チャートにまとめて公表するとともに、それを踏まえての教員の意見や感想などを掲載したものである。これによって各教員は自分の授業方法の至らない点あるいは気が付かなかった長所を知ることができ、授業の改善につなげることができる。また、学生にとってはシラバスからだけでは分からなかった、教員の授業に込められた意欲などを知ることができる。

4. 本報告書の執筆手続き

本報告書は、学長室が学部長会で協議しながら草案を作成し、毎月開催される大学自己評価委員会で何度も確認しながら編集を行ったものである。草案は、10月大学自己評価委員会において第1章、第2章、第6章、第10章を、11月大学自己評価委員会において第5章、第7章、第8章を、12月大学自己評価委員会において第3章、第4章、第9章を配布し、自己評価委員の確認を受けている。

大学基準協会への草案提出後、すべての原稿を全学役職者および学部長と研究科長が分

序章

担し、関係教職員との読み合わせをして、報告書を修正した。その後、3月大学自己評価委員会において、自己評価委員による最終校正を行い、完成に至っており、大学全体で確認された報告書とすることができる。